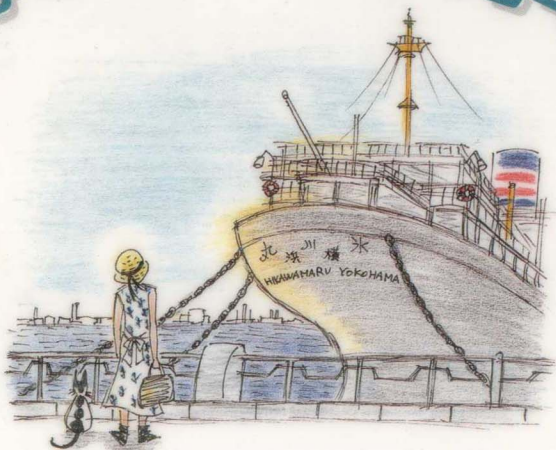
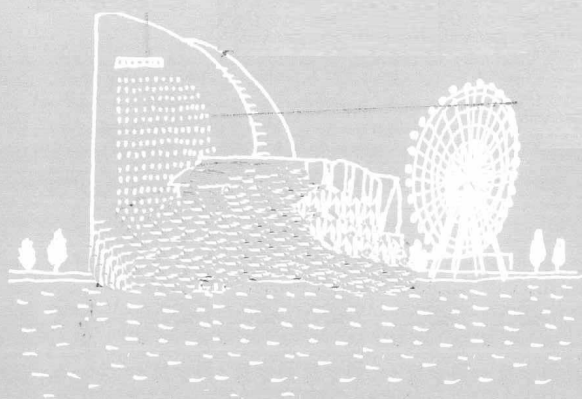


海の見える観覧車



宮原芽映

Mebae Miyahara



あの日からずっと、
観覧車は わたしたちを乗せて、
回りを回っていたのかもしれない

海の見える観覧車

宮原芽映

初版印刷 一九九六年四月二五日
初版発行 一九九六年四月二五日

発行所 河出書房新社

発行人 清水 勝

東京都渋谷区千駄ヶ谷二二二二
TEL (三三〇四) 八六一一 (編集)
(三四〇四) 一二〇一 (営業)
振替〇〇一〇〇一七・一〇八〇二

印刷 組版 カックマデイア
株式会社亨有堂印刷所
製本 小泉製本株式会社

装幀 岡本 明

©1996 Printed in Japan
定価はカバー・帯に表示してあります
落丁・乱丁本はお取替えいたします
ISBN4-309-01057-1

宮原芽映（みやはら・めばえ）
福岡県生まれ。東京都立青山高校在学中、
バンドを結成しボーカルを担当。バンド
解散後ソロ・アルバムをリリースし、シ
ンガーソングライター、作詞家として活
動を続ける。アルバムに『おかえり』
『ドアは開けとく』、著書に『近頃またあ
なたに恋してるって気づいた』『熱のあ
る真夜中のリンゴジュース』『ワリカン
にしよう』などがある。

まえがき

故郷を自慢できる人がうらやましい。

父の転勤によつて、国内を転々として育つたわたしには、故郷と言える場所がない。どこに住んでも「自分の住むところはこのではない」という気がしていた。それがどこなのかわからないまま、三十六年が過ぎた。

いまだに独り者で実家にいるのをいいことに、気が向くとふらりと旅行に出かける。そうすることによつて、無意識に安住の地を探してきたのかもしれない。

旅先で出会う友人たちは、その土地の素晴らしい景色、人、食べ物、お酒を、惜しみなく教えてくれる。彼らは自分の住んでいる町を、いいところも悪いところも全部ひっくりめて、まるで家族のように愛しているのだ。

彼らを見ているうちに、わたしも自分の住んでいるところを、もっと知りたいと思うようになった。

今わたしは横浜に住んでいるが、この街のことをまるで知らない。

二〇年以上歩いてきたにもかかわらず、家から駅までの道にどんな木が植えてあるのか

さえ知らない。つい先日、歩道の植え込みの間に黒い石のモニュメントを見つけて、「こんなものが、いつからあったのだろう」と、びっくりしたばかりである。

たぶんぼーっと歩いていたうえに、ここではない外の世界へばかり目が向いていたためだろう。

振り返ると嬉しいとき悲しいとき、いつもこの街の景色を眺めていた。そして旅先から帰るたびに、この街がわたしを迎えてくれた。

「住めば都」という言葉があるが、最近「住めば故郷」だという気がしてきた。

今いるところを、もう一度見つめてみよう。

故郷のない人は、故郷を探して、

故郷を離れている人は、第二の故郷を探して、

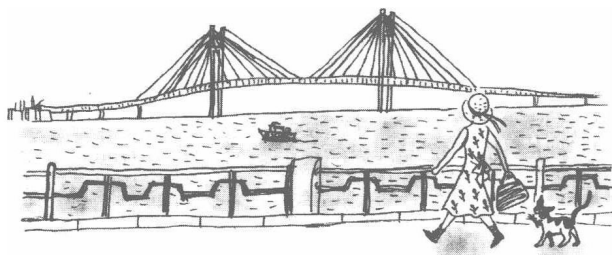
故郷にいる人は、新たな発見を求めて。

そうして歩くうちに、わたしもこの場所を家族のように愛していることに気づくかもしれない。

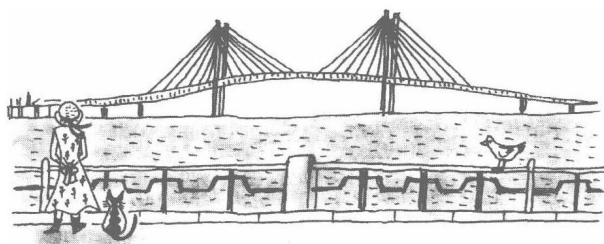
この場所が宇宙までつながっていることも。

目次

まえがき	7
猿たちの観覧車	7
B U D D Y	17
渡辺はま子さんのこと	23
中華街の夕暮れ	31
自転車をこぐ	38
祖母が船に乗った頃	46
発祥の地	59
平成伊勢ぶら日記	64



窓.....	71
ヤッパッパ.....	82
野球場の空.....	93
チヨコレート電車日和.....	101
テンポを変えてもう一度.....	115
縄文人の話.....	125
わたうちだにの住人.....	131
怪獣の夢.....	139
電車の行方.....	146
さかさまの星空.....	156



海
の
見
え
る
観
覧
車

猿たちの観覧車

横浜港に沿って広がる、みなとみらい21地区の一角に、横浜美術館がある。

わたしはトンマと美術館のレストランで待ち合わせた。

わたしたちは久しぶりに会いお茶を飲んだ後、常設展示室のマグリットやダリの絵をぶらぶらと眺めて過ごした。

六時の閉館にせかされるようにして外に出ると、夕暮れの空にくつきりと浮かびあがる、巨大な光の輪が目に入った。

観覧車の灯だ。

「乗ろうよ！」と、トンマが先に叫んだ。

わたしたちは校門を走り抜ける女子高生の勢いで、乗り場へ向かって駆け出していた。

トンマは高校時代の同級生である。すらりとして髪の毛の長いお嬢さん風の彼女には不似合いなあだ名だが、本人はむしろ気に入っている様子だった。

彼女は学生の頃から、いわゆる女の子っぽさを感じさせなかった。低音でしゃべり、言いかたも態度もぶっきらぼうで、細かいことに無頓着だった。

クラスの女たちがもめた話などを聞くと、トンマは「おお、めんどくさいっ」の一言で片付けた。そのくせ、涙もろいところもあった。そんな彼女となると、わたしはまったく気疲れしなかったのである。

彼女に強い印象を持ったのは、入学したてのオリエンテーションで千葉へ行ったときのこと。都立高校の自由な空気に憧れて入学したわたしは、消灯後早速はめをはずすべく、布団の中の女子たちに提案した。

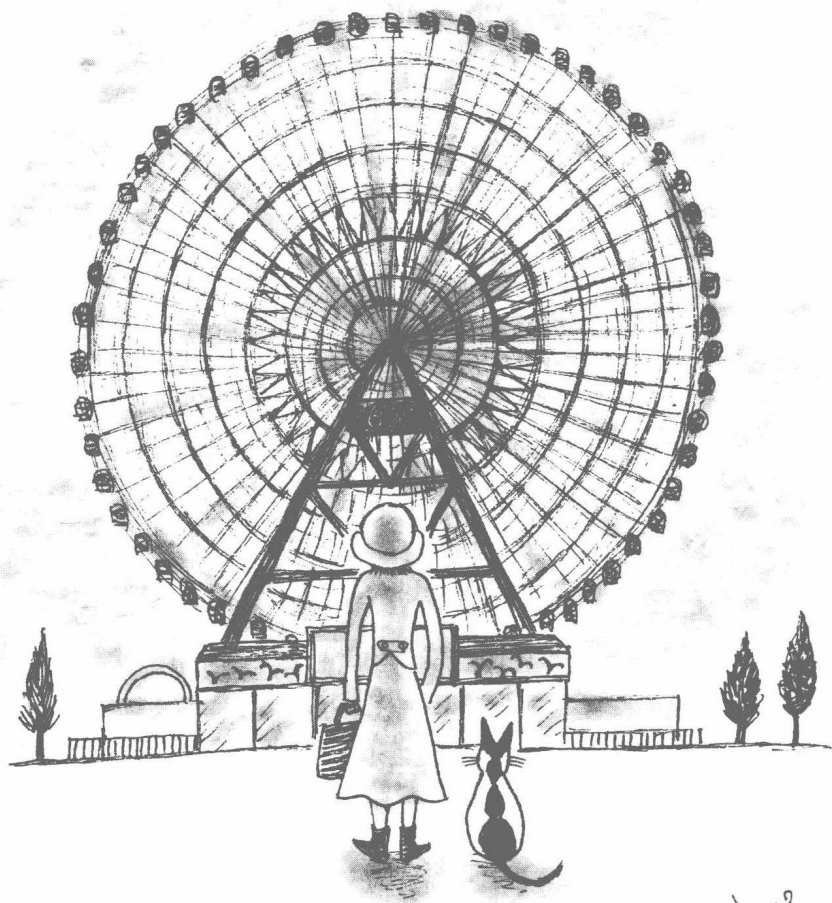
「男子の部屋へ行つて、来そうな奴をここへ連れ込んじゃおうよ」

数人が積極的に同意した。反対する者もいなかったもので、わたしともうひとりが兵隊になった。パジャマのまま忍び足で廊下を歩き、男子の部屋の襖を開けると、当然ながら彼らは戸惑った。

「ほんとかよ」

「オイどうする？」

ヒソヒソやっているうちに、教師の部屋のドアがバンと開き（なぜか教師の部屋だけ、襖ではなくドアだった）、アライグマと呼ばれていた担任の五〇近い男の先生が、青白い



mebae

こめかみに筋を浮かせながら現れた。わたしだけが逃げ遅れ、厳しく叱られたうえに罰として正座を命じられた。

暗い廊下にひとりで座っていると、しばらくして襖がそろそろと開き、髪の高い女が出てきて隣りに座った。

「あたしも一緒にけしかけたクチだから……」

びっくりした。彼女にけしかけられた覚えなんかない。

「いいのに。見つかったあたしが悪いんだから」

つっぱねるように答えながらも、内心は救われた気持ちだった。それから一〇分ほどの間、わたしたちは話すこともなく、ひんやりとした廊下に座っていた。ときおり男子の部屋から、クスクスと笑い声が漏れていた。

「あのときは本当にいい奴だと思ったわよ」

一七年経って、美術館のレストランで言ったのだが、彼女はまるで覚えていなかった。

高校一年の冬休み、わたしたちは渋谷の喫茶店にいた。

冷たいあの廊下より、もっと気まずい空気の中で座っていた。わたしの隣りに彼、正面

にトンマ。今でも思い出すと、胸の辺りがざわざわする。わたしは彼女の付き合っていた相手を奪ったのだ。

何を話したか覚えていない。ただトンマが投げ捨てるように、わたしと彼に向かつて、「これからも友達だよ」と言ったことだけ覚えている。わたしはその言葉にホッとしながら、優越感と同じくらいのうしろめたさを感じていた。

あの頃は「きれいごと」が大事だった。「恋愛」よりも「友情」を選ぶ方が絶対かっこいいのに、できない自分がいた。自分の中にある「友情」という感情は、「恋愛」にくらべたらはるかにちっぽけで頼りないのだと思っていた。

こうして人のいいトンマに、わたしは二度救われた。

その後、彼とは一年ほど付き合ってたが、彼女とは卒業するまで付き合い続けた。ときには学校を抜け出しパチンコ屋へ行ってみたり、ロック喫茶の薄暗いテーブルに一杯のコーヒーで何時間も粘ったりした（今思うと何て無尽蔵に時間があつたのだろう）。

卒業してからは疎遠になり、二年か三年に一度、どちらかの気が向くと電話をして待ち合わせた。

二六歳の頃、会いたくなつて電話をすると彼女のルームメイトが出て、「真紀子は結婚

して、引っ越しました」と言った。

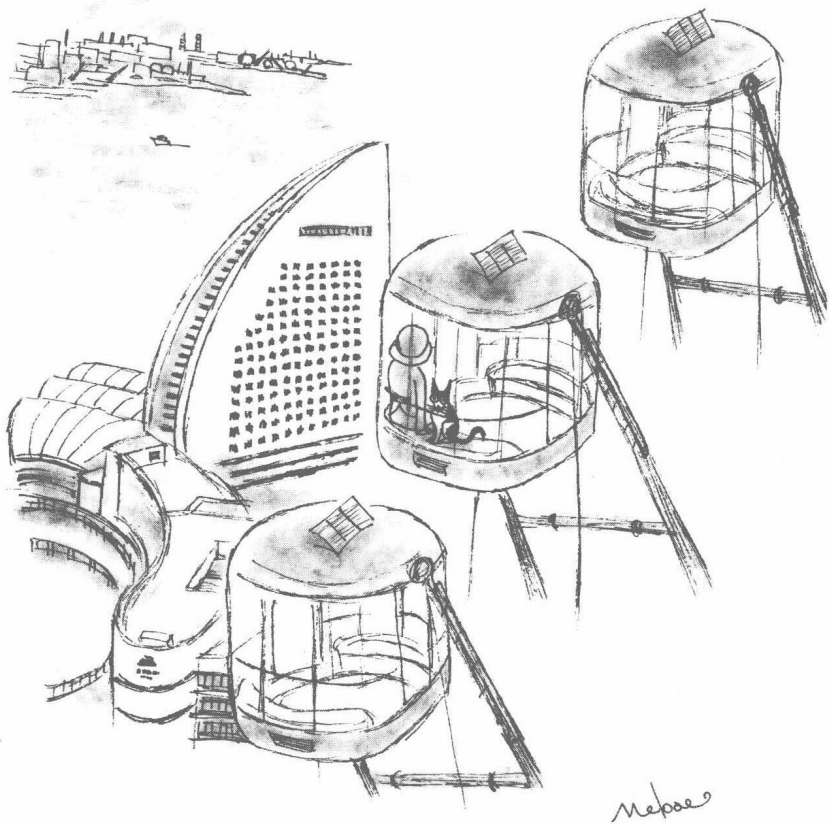
ショックだった。電話を切った後でむしように腹が立った。

何も知らされていなかったからではない。彼女が自分より先に結婚したことが悔しかった。その頃わたしは結婚できない人に恋をしていた。友人として祝福すべき彼女の幸福を、嫉妬していたのである。

その夜、わたしは泣いた。ふいに自分がみじめな女に思えた。それから長い間、彼女と会うことはなかった。会いたくなかったからだ。わたしたちが「久し振りに会おう」と美術館で待ち合わせをしたのは、わたしがその恋をあきらめ、彼女が離婚して実家に戻ってからのこと。そして観覧車に乗るため、一緒に並んで順番を待っている。

金属の扉がガチャリと閉じられ、ゴンドラがゆっくり空へ昇りはじめた。夕暮れは青から赤、紫から群青へとみるみる色を変えていく。空がいちばん暴れる時間だ。

足もとの海は、空の色を反射させながら、やがて水平線の彼方まですっぱりと灰色に覆われていく。すると港は次々に灯をともしはじめ、あつという間に一面宝石箱のようになる。黒っぽい海面に幾つも引っ掻いたような筋をつけて移動する、タグボートの小さな光。海側の空はほとんど夜になり港の光を赤く照り返しているが、背後ではまだ遠く富士山が



切り絵のように見え、その上には消えかかった夕焼けが真つ赤な尻尾を残している。

「今だけ魚眼レンズになれたらいいのに！」

トンマが言った。隣りのゴンドラでは、若いカップルが恥ずかしそうにくつつき合っていたが、わたしたちはあっちへ座りこっちへ座りして、まるで初めて高いところに登った猿のように大騒ぎし続けた。わずか一五分の空中旅行だったが、宝物を山分けした共犯者の気分で地面に降りたつた。

わたしと彼女は、一七年という年月をどこに置いてきてしまったんだろう。

同級生って不思議だ。一瞬のうちに時間が逆戻りしてしまう。変わったと思いつながらドアを一枚開けると、何も変わっていない。そして気疲れのしない彼女と、わたしは気まずかった思いなどはすっかり忘れたかのように、一緒にはしゃぎ、笑い合っている。

わたしたちを今日までつないできたのは、「友情」と呼べるようなかっこいいものではなかった。確かに気の合うところはあるけれど、それ以上に会いたいときだけ会い、お互いの都合でいくらでも相手をほったらかしにできる、そんな身勝手さのおかげが大きかった。自分勝手にやみくもに転がってきた年月、振り返ると後ろを「友情」は亀のようにとぼとぼついてきた。